みやもとだより

第30号　令和元年12月発行

季節のおまつり

奥三河の花祭

豊橋から飯田線で北東に約二時間、東栄という町は静岡、愛知、長野の県境にある。山々が交錯している奥三河地方には、「花祭」という神事芸能が今も十数か所の集落に伝わる。七百年前、鎌倉末期から室町時代にかけて、熊野の山伏や加賀白山の聖（ひじり）たちが伝えたものという。

冬至の前後は自然や霊魂が衰弱する時期で、太陽や魂の復活を願って湯を立て清める霜月神楽（湯立神楽）の一種が十一月から一月にかけて行われる。

祭りは花太夫が司り、御幣を切って準備し、祝詞や呪言を唱える。宮入（みやいり）と呼ばれる補佐役数名が、太鼓を打ち神楽歌を朗詠する。花宿（祭を行う家）や集会所には舞屋が設けられ、舞庭（まいど）と呼ばれる土間の中心に据えられた湯釜には夜を徹して薪がくべられる。湯釜の上や周囲には五色の色紙で作られた「湯蓋」や「白蓋」という方形の天蓋がびっしりと吊るされ神聖な場所であることを示す。神々は湯を焚くことでこの天蓋に降臨し宿るという。

榊鬼が激しく舞う

祭りは神迎え、湯立から始まり、宮入の舞、青年の舞、花の舞、鬼の舞などと続く。最初の方に出てくる山見鬼は白山（＝浄土）を割り開く鬼で、終盤、最高調に達する「湯ばやし」に登場する榊鬼は、花祭りの目的である「生まれ清まり」を実現するための呪法をふむ鬼である。花祭のなかで村人に最もうやまわれ、恐れられており、山の神として胸や背中に榊の小枝をさしている。榊鬼の振りかける湯を浴びれば無病息災で一年過ごせるといわれる。「てーほへ、てほへ」と掛け声をかけながら見物人も歌い踊り、最後の神返しまでほぼ一昼夜をかけて舞庭は興奮に包まれる。

（写真・文　宮本卯之助）

「四つ舞」舞人の少年が大釜のまわりで舞う

この国の佳き伝統とともに
宮本卯之助

神輿むかしばなし

神輿職人道具

日本の伝統的社寺建築と同じく、神輿の主要な構造部分は木で作られています。大きな材木の切り出しや運搬には重機が使われますが、細工をして仕上げるまでは、古より職人の間で受け継がれてきた道具を使いこなしています。

中でも木材の表面をなめらかに削るカンナは、欠かせない道具です。ごく細かい溝や際、曲面など、あらゆる部分を削ります。複雑で手間のかかる「ほぞ：部材の接合部」は、何種類ものノミとカンナを用います。「ほぞ」と「ほぞ」を一分の隙もなくぴたりと組み上げるには、それぞれの道具を常に切れ味よく保つ必要があり、道具を研ぐのも職人の仕事です。江戸時代から受け継がれてきた、職人たちの手先の一部ともいえる道具一つひとつに、職人の魂が込められています。

祭とともに

国民祭典

晴天に恵まれた十一月九日（土）、天皇陛下の御即位を祝う国民祭典が皇居前広場で執り行われました。第一部の奉祝まつりでは、東京及び近郊より集まった多くの神輿や山車が渡御し、賑々しく囃子の音色が響き渡りました。浅草神社の一之宮ほか、赤坂氷川神社の神武天皇江戸型人形山車などもお目見えし、宮本も準備から随行までお手伝いをさせていただきました。五月に三社祭を終えた浅草っ子をはじめ、神輿を愛する皆様が一斉に活気づき、晴れやかに御即位をお祝いする一日となりました。

浅草神社一之宮渡御

古典芸能へのとびら

小鼓

能楽や歌舞伎で美しい音色を響かせる小鼓は、良い音が出るようになるまでに長い年月がかかると言われています。何十年、百数十年と大切に使われてきた小鼓を、さらに次の世代に受け継いでいくため、ときには修理が加えられます。

細い鉄輪に仔馬の革をかぶせて縫い合わせてできる小鼓革は、その縁を極く細かい針目で縫っており、千綴（せんとじ）と呼ばれます。千とは数量などが多い場合、千貫神輿、千枚田などのように例えとして使われますので、細かい縫いのことを称して付けられた名前です。いずれにせよ、特に薄い小鼓革に対し、力を入れすぎず、絶妙な加減で作業を進めるには、相当の技量が必要です。使い込まれた小鼓の傷み具合をそれぞれに見計らい、修理を施すことで、美しい音色を後世に伝えていくお手伝いができたらと思っています。

極寒の夜に徹夜で、湯釜のたきぎの炎と煙に包まれ「ねむい、煙い、寒い」といわれる花祭に、八年ほど前たずねたが、天竜川の中程、交通手段の飯田線も秘境の駅号が走っているくらいの隠れ里に、かくも原初的な雰囲気の漂う祭を目の当たりにし非常な興奮を覚えた。里人と神々が遊び興じ、「悪態祭」とも呼ばれ拍子につれ踊り狂いながら男はある限りの悪態をはき通す。厳冬に静まっていた生命力を呼び起こす花祭は民俗学や宗教学にも大きな影響を与えた。

一方、東京では令和の御代を祝う国民祭典が盛大に執り行われました。長きにわたり浅草に根を下ろす弊社にとって、祭りを通して皆様の晴れやかな姿を拝見することは大変嬉しく思います。新たな年に向け精進を重ねてゆく所存です。

宮本卯之助

発行
株式会社 宮本卯之助商店
企画広報室
〒一一一－〇〇三五
東京都台東区西浅草 二－一－一
電話 〇三－三八四四－二二四一
www.miyamoto-unosuke.co.jp